



(公財)青少年育成福井県民会議会長賞



障害への理解を願う

鯖江市中央中学校 3年
山 中 彩 也 乃

世の中には様々な障害があります。身体障害や発達障害、見た目には現れるものから行動に現れるものまで、同じ障害でも重さには個人差があります。

わたしの妹は知的障害者です。

2011年、私の妹は誕生しました。当時4歳の私は障害というものを知りませんでした。でも大きくなるにつれ、自分の妹は他の子よりもできない子なんだ。そう感じるようになりました。一人で服も着替えられない、会話も出来ない、トイレにもいけない。私は妹の存在を恥ずかしいと思うようになりました。

妹が小学生になってからは店内で大声を出したり、家に私の友達が来ると話しかけたり。そのたびに私は謝っていました。自分は何もしていないのにどうして謝っているのだろう。妹といると嫌だなと感じることも多くなっていました。おまけに妹は両親からたくさん褒められていました。私の方が何だって出来るし、色んな賞だってもらっていました。でも私が妹より褒められることはなく、私は悔しさのあまり自分の賞状をぐしゃぐしゃにしました。こんなことがあっては妹のことを好きになんてなれません。それどころか私は妹を避け、周りに存在を隠すようになりました。

そんな風に過ごしていたある日、母からこんなことを言われました。

「もし、自分たちが死んだら妹の面倒をみてほしい。出来れば一緒に暮らしてほしい。」

私はうなずいたものの、内心ではすごく嫌でした。私は結婚したいし、子供も産みたいのに妹がいては何も出来ないのではないかと。そう思ったのです。世間は障害者に冷たい。それは今までの経験から痛いほど分かっていました。だから理解してくれる人はいないと思いました。私は妹という縄に一生縛られるのか。正直絶望しました。もう妹の顔も見たくない。そう思うほどに限界でした。でも家族ですからそういうわけにはいきません。私は夜な夜な妹について考える日々が続いていました。

そんなある日、ふと思ったのです。自分ってなんてひどいんだろうと。障害者だから、人より劣っているから。そんな理由で人に冷たくする自分自身のほうがみっともないと思いました。次の日、妹が笑いながら私の名前を呼んでくれました。その瞬間、なんてすてきな笑顔なんだろうという気持ちと同時に、自分は縛られたわけじゃなくて妹と切っても切れない縁で繋がっていたんだと分かりました。一度壊してしまったものを取り戻すのは簡単ではありません。私と妹はまだぎこちないままですが、時間をかけて手を取り合いたいです。

皆さんが障害者に抵抗があるのは仕方のないことだと思います。一般の人とは当然違いますし、関わっている自分も変な風に見られそうという気持ちも分かります。ですが、障害=変ではなく、個性として理解していただけないでしょうか。障害者に罪はないし、彼らも一人の人間です。生きているんです。だから、軽々しく馬鹿にしないでください。ぜひ、一晩だけでも障害者について考えてみてほしいです。

私は障害者を健常者の皆さんが理解し、障害者も健常者も幸せになれる世界を人々が創ることを強く願っています。なぜなら障害者も健常者もこの世界で生きているからです。

私自身も、そんな世界に近づけられるようもっと障害者の理解を深めていきたいです。障害者の妹を抱えながら。